

子どもの声を聴くとは

前回、広木先生の講演の抜粋を書きましたが、その後の質問の応答について「ひだまり」のニュースに載っていました。その質問に広木先生が答えたことのいくつかを取り上げて紹介します。

先ほどのHSCについての質問では『HSCの子供が学校で苦しさを感じてしまう、そう感じてしまう自分を責めて不登校になるケースがとて多いように感じていますが、その子供に親はどんなサポートをしていったらよいのでしょうか』と書いてあるんです。何かをしてあげることは大事なことですけど、私は何かをしてあげるというよりも『子供が何をしたいかを知りたい』ということが一番大事だと思います。

子供の願い、子供の要求、また、何が嫌なのかをちゃんと子供から聴く。そこを聴かずに、親の善意でしてあげるのは、むしろ子供の経験を狭めることです。子供の経験を少しずつ広げていくためには、子供が「やりたい」「これはしない」という子供の願いをちゃんと聴いて、それを共感的に理解し実現するサポートをする。これが基本だと思います。

子供の話をちゃんと聴くというのは、なかなか難しいことです。それがこのケースの相談というわけではないのですが、それは共通の問題だと思います。多くの例は、親は自分の『聞きたいこと』を聞くのです。今日は、どうだった。何があったのと自分の知りたいことは聴いているのです。ところが子供が「そこでね……」と言い始める時、親の方は知りたいことは知ったと、もう満腹で、話そうとする子供の心の中にはもう関心が離れるのです。すると子供は“あ、お母さん聴く気がないんだ。”と思って話すのをあきらめるのです。それは親が悪いというより、親が押し通ることに依ります。自分の聞きたいこと優先ではなくて『子供が話したいことを聴くこと』をやってみてください。苦しくなると思います。なぜなら自分の知りたいことを知って「終わった」と思った後だからです。子供が言いたいことを話していると、子供の話が「早く終わらないかな」と思えてきます。そして、また『助言と忠告の虫』がざわざわと騒ぎ始めるのです。子供の話に言わなくてもいいのに、「でもね、お母さんはこう思うの」「そんな時はこうするといいよ……」と子供がたずねていない忠告が始まるのです。子供は「あ、始まった」「ただ私の気持ちを聴いて欲しいのに」とズレが起るのです。だから『最後まで聴く』ということとは『聴いて終わったら、終わりなのです。その時「話してくれてありがとう」と言えたら子供は心がスーッとします。

よく「思春期になったから全然話さなくなった。」という話がありますがそれは「話さないようにしたのではないか」と振り返ってみませんか。

聴くことに努めていても、少しすると、また『助言と忠告の虫』が出てきて「子どもから、お母さんは、また戻った。広木先生の所にもう一度行ってこいと言われたのですが」と親からの電話です。子どもってすごいですね。ちゃんと聴いているか、助言・忠告の虫になっているか聴き分けるのです。

それで私は「お母さんは本当に真面目で、この努力は素晴らしいと思う。最後まで話を聴いて、そこでありがとうで終る。そして、その時にたまたまストレスは親の会に行つて、他の人に聴いてもらいましょう」と伝えました。

私はこの特に敏感なHSCというふう言われている、私にしてみれば普通の子ですけど、そういう子どもたちも含め、子どもの話を聴く。そして、子どもの願いを受け止める。そこで終わり「どうもありがとう」って。それかだいじだと思っています。また、それと同じようなお話を参加者から聞きました。『子どもが“ママのことを死にやえって思っちゃう。言いたくないのに思っちゃうの。苦しい。そういう自分が嫌いだ”と言い始めたことが、私が娘の苦しみに気づいたきっかけでした。それから毎日何回も言ってきて、私も苦しいです。昨日初めてカウンセリングを受けました。そうしたら、病院に行つて欲しいと言われました』この話、本当に正直に書いてくれました。このケース。私はまず「ママのことを死にやえって思っちゃう」と自分の思ったことを言ってくれたことが、すごいことだと思います。それくらい実は子どもたちってというのは、親のことを思っていて、言いたいことがあるのもめめためているのですよ。そして、だんだん言わなくなるのです。でも、このケースは言ってくれているのです。私としては、その言葉自体はトゲのような言葉だから、聴くのはとてもつらいだろうけど「そうだったの」と正直に言ってくれたことに対して「何を反省したらいい。考えてみるね」「わかったことがあったら教えてね」という。この姿勢を貫くことができるかどうかだと思います。親の『助言と忠告の虫』が騒いでしまい、言われた子どもは苦しくなつて、このような言葉を親に送る。それはあり得ることです。その言葉を聴くのは辛いけど「話してくれてありがとう」「何を改めたらいいか教えてね。」と、これを貫くことではないかと思います。これは生きる姿勢・子どもとの関係です。この関係をどう変えるかということです。それは、「子どもに変われ」ということではなく、「自分が変わる」そのことによって関係が変わるのです・・・と広木先生は話しています。!!